「転回」の思想
―ハイデガーの思索の道に通底する中心的なモチーフについて―
要約

貫井　隆

第一章：従来の転回論の整理と反駁

本論の目的は、〈ハイデガーの思索の道において一貫して論じ続けられている中心的なモチーフとは何か〉、ということを明らかにすることである。「一貫していること」を明らかにするということは、その裏で「変化したこと」を明らかにすることと同義である。〈ハイデガーの思索の変遷において、一体何が変化し、何は変化しなかったか〉ということに関しては、これまでのハイデガーの研究史において様々な説が唱えられてきたが、未だ議論の一致を見ていない。

ハイデガーの哲学全体を「思索の道」と捉えることができるならば、従来、「転回」がその道全体の「道しるべ」と考えられてきた。そしてこの思索の道は、「転回以前」、「転回以後」という形で区分されることが多かった。この立場によれば、転回とは〈『存在と時間』における「存在の問い」の計画の撤回と、それに代わる新たな路線の出発点〉を意味する（本論は便宜的にこのような解釈を、転回解釈Ａとする）。このような立場に対して、これまで、〈このような意味での思索の転換点は、実際のところはハイデガーには存在しない〉とする解釈も提案されてきた（本論はこの立場を便宜的に、転回解釈Ｂとする）。

第一章において本論は、ハイデガー自身の転回の多義性を整理した。それによればハイデガーの転回は、大きく次の四義に分けることができる。１．問いの転回：「基礎存在論」から「メタ存在論」への転回、２．本来的転回：存在者と存在が相互に存在忘却から転換することとしての転回、３．存在の転回：２の本来的転回のうち、存在が存在忘却から転換することとしての転回、４．転回の思索：２の本来的転回のうち、人間を含む存在者が存在忘却から転換することとしての、転回についての思索。その結果本章は、以上の多義性の内に、転回解釈Ａが主張する意味での転回は存在しないことを確認した（ちなみに本論の議論は、第一章から第三章までが主に１の意味での転回にかかわり、第四章から第七章が、主に２（３、４）の意味での転回にかかわる）。

では、ハイデガーには思想の「翻意」や「回心」と言いうるものはなかったというのだろうか。仮になかったというのならば、なぜハイデガーの語彙は、いわゆる前期（１９２７年の『存在と時間』刊行まで）から中期（１９２８年から１９３５年まで）、後期（１９３６年以降）と大幅に変化を遂げたのだろうか。『存在と時間』の時期におけるハイデガーの中心的な用語である「企投」、「本来性」、「非本来性」、「頽落」、「時間性」、「地平」、「形而上学」、「存在論的差異」、「存在論」、「存在」等は、前期から中期に移行するにつれて、使用頻度が大幅に減っている（「存在」の場合は、それ以後も用いられているが、その表記が Sein から Seyn や Seyn へと変更されることが多くなる）。なぜ、これらの語は殆ど用いられることがなくなったのだろうか。前期の用語の撤回と、新たな用語における記述の開始が、ハイデガーの思索内容の変化を如実に物語っている、ということではないのだろうか。

第二章：ハイデガーの語彙変化の理由

第二章では、上で挙げた語の使用の変遷を一つ一つ追ってゆき、なぜこれらの語の使用頻度が下がったのかということを、ハイデガー自身の自己言及をもとに明らかにする。結論から言えば、本論はハイデガーの語彙の変化を、それは第一章で概略的に述べた『存在と時間』における存在の問いの計画を事柄に即して遂行するためになされた、と本論は考える。語彙の変化の理由は、問いの転回を含む、『存在と時間』で掲げられた存在の問いの計画の撤回ではなく、〈前期ハイデガーの語彙によって示された新たな形而上学の遂行が、ハイデガー自身の意図に反して（GA95, 309）、伝統的形而上学の影響の元で理解されてしまったから〉であると考えられる。そう主張しうる論拠を

示すために、本章では上で挙げた語の使用の変遷をそれぞれ追い、なぜこれらの語の使用が意図的に控えられたのかということを、ハイデガー自身の自己言及をもとに明らかにすることを試みる。

本論はまず「企投」という語を取り上げる。企投とは、現存在の「存在可能性」（現存在が将来的に任意の仕方で存在する可能性）を「将来」という時間的地平へ向かって「投げる」ことを指す（このことはハイデガーにとっては、存在者の存在を了解することでもある）。たとえば、現存在は「自分の建てた雨よけに泊まる」という自身の存在可能性を将来へと投げることができる(SZ 84)。このような可能性が投げられることによって、現存在は現在身の回りにある「世界内の存在者」とのそのつどの関わりを、この可能性が最終的な目的となるように編成することができるようになる。たとえば、目の前の或る存在者を、「そのような雨よけを建てるためのハンマー」として初めて理解し、使用することができるようになる。

また、『存在と時間』によれば、あらゆる企投は「被投的企投」（SZ 285）である。この「被投」の意味は、ハイデガーによれば「現存在は現存在としておのれ自身をそのつどすでに企投してしまっており、現存在は、現存在が存在する限り、企投しつつある」（SZ 145）ということである。つまり、企投は、主体の意図によって行ったり行わなかったりすることが可能なものではなく、そのような意図にかかわらず、つねにすでに行われてしまっていることである。さらに、投げられる存在可能性も、あらゆる可能性の中から自由に選択できるわけではなく、すでに一定の制限を被った可能性である。よって、企投というのは「おのれがすでにそのなかへ投げられているところの諸々の可能性へむかっておのれを企投する」ことであると言われる（SZ 284）。これがハイデガーにとっての企投が一般的に意味するところであると考えられる。

しかし、『存在と時間』の企投は、特にそれがつねに被投的企投であるということに関して、ハイデガーによれば十分には理解されなかった。企投は、自由に選択された自己の任意の可能性へ向かって、意図した時にのみ行われうるようなものとして解釈されてしまった。『存在と時間』刊行から約１０年後の『哲学への寄与論稿』において、ハイデガーは次のように振り返って述べている。「『存在と時間』の中で「存在了解」〔これはハイデガーにとって存在可能性を企投することを指す〕として立てられたものは〔…〕表象作用の単なる拡大のように思われてしまったが、しかし、これは全くの別物である」（１９３６-３８年）（GA65, 223）。また、次のように述べられることもある。「『存在と時間』で言及されている「企投」が表象的定立だと理解されると、それは主体性の働きとして捉えられることになる〔…〕」（「ヒューマニズム書簡」）（１９４７年）(GA9, 327)。

ハイデガーがここで問題視しているのは、自身の概念が「主体性の働き」として誤解されてしまったことである。ハイデガーによれば、これは企投にかぎらず、『存在と時間』を構成する他の主要語の受け取られ方にも言えることである。そして、この誤解を生むことになった一連の語を指して、１９４７年には、ハイデガーはそれらを「〔伝統的〕形而上学の言葉」（GA9, 328）と呼ぶことになる。『存在と時間』の時期のハイデガーは多くの造語を案出し、既存の哲学用語にも新たな意味を付与して用いていた。とはいえ、それらの多くの語を、それまでの伝統的な用語から借用していた。それらを借用するかぎり、従来の意味で自身の語が解釈され、その語の背景にある伝統的な問題設定に自身の思索が押し込まれてしまうことから免れなかったとハイデガーは述べている。「〔…〕〔伝統的〕「形而上学」の支配によって、われわれは存在を〔…〕存在者の表象作用の産物としてしか表象できなくなってしまった。〔…〕この危機は設定された問題方向においてさらに先へと考えることによっては、克服できなかった〔…〕」（『哲学への寄与論稿』）（１９３６- １９３８年）（GA65, 450 - 451）。ここでの「設定された問題方向」とは、ハイデガーによれば「超越論的な問題設定」のことである。「超越論的な問題設定においては、まだ、なんらかの仕方で、形而上学の言葉が語らなければならない」（１９６２年）（GA14, 37）。

では、伝統的な語の影響の下では、なぜこのような超越論的な問題設定、そしてそれに基づく主観主義的な誤解が生じてしまうのだろうか。その根本的な理由を、ハイデガーは、伝統的形而上学が一貫して〈流れ去る時間〉を前提することに求めている。〈流れ去る時間〉とは、日常的に私たちが依拠している直線的な時間概念であり、それによれば、現在は「まだ現在ではない」未来（と

しての非現在）から流れて来ては、「もう現在ではない」過去（としての非現在）へと流れ去る（GA64, 121; SZ 426-427; GA 26, 268; GA40, 215; GA65, 257; GA8, 100）。しかし、『存在と時間』が扱おうとしていた事柄を論じるには、このような「伝統的な時間概念はいかなる観点からしても不十分」であった（「リチャードソンへの手紙」）（１９６２年）（GA11, 147）。なぜなら、ハイデガーにとっての「時間性とは〔現在に存在する〕それまでの存在者が、初めて〔非現在としての〕外へと出て行くということではない」（『存在と時間』）（１９２７年）（SZ 329）からである。ハイデガーにとっての時間性とは、現存在がいかなる時も〈すでに何らかの存在可能性を企投している〉という意味において、現在においてすでに未来を存在してしまっており、〈すでに何らかの過去をもとに現在を生きている〉という意味で、現在においてすでに過去を存在してしまっているということであって、〈流れ去る時間内に閉じ込められた主体が、その外部へ超越したりしなかったりする〉ということではなかった。にもかかわらず、ハイデガーの時間性は「形而上学の言葉」の影響によって、そのような「主観的なもの」として捉えられてしまったという（GA38, 144-149）（『言葉の本質への問いとしての論理学』）（１９３４年）。

これに伴って、ハイデガーの他の語彙も、もっぱら〈流れ去る時間内の主体による外部への超越〉という、伝統的な「超越論的問題設定」のうちで理解されてしまったと考えられる。そうして企投だけでなく、たとえば「頽落」という語も本来は、個人に対する一般的な価値付け以前の次元における、現存在に備わる存在論的な動性（ハイデガーの時間論においてを、通俗的時間を基準に存在を了解してしまう傾向）を意味していたにもかかわらず（SZ 179-180）、一般的な価値付けにおける「悪い」という価値付けを意味することになってしまった（「形而上学の超克」）（１９３６-４６年）（GA7, 89）。

このような状況を脱するために、ハイデガーは従来の語彙を変化させたと考えられる（GA65, 216）。ハイデガーは「時間性」や、時間性を意味する「存在の意味」も、徐々に「存在の真理」等と言い換えることになるが（GA95, 367、GA65, 193、GA9, 337 等）、その理由についても、後年次のように述べている。「〔…〕『存在と時間』の後、「〔存在の〕真理」が、「〔存在の〕意味」〔＝時間性、テンポラリテート〕という表現にとってかわる。それは、今や存在についての問いが〔…〕もはや〔伝統的〕形而上学的な問いとして捉えられることが決してないようにするためである」（『四つのゼミナール』）（１９７３年）（GA15, 373 ）。

本章では企投や頽落以外にも「時間性」、「本来性」、「形而上学」、「存在論的差異」、「存在論」、「存在」等の語の変遷を追って行き、同様の結論に至った。以上のことを考慮に入れるならば、本論第一章で言及した転回（基礎存在論からメタ存在論）がそこで生じるとされた『存在と時間』第三篇の出版の断念の理由は、〈主観主義的な誤解を惹き起こす語彙によっては、この転回を事柄通りに記述することは不可能である〉とハイデガーには思われたからであると考えられる。ハイデガーによれば「転回は、存在者（オン）の「超越」の内部では、自己を十分に経験させない」（１９４６年）（GA97, 203）。

では、ハイデガーにとっての転回や語彙の変化が、ハイデガーの思索内容の撤回を意味しないとすれば、ハイデガーの『存在と時間』における「存在の問い」の計画は、第一章で述べたように、『存在と時間』以後も保持されているのではないだろうか。

第三章：一貫する『存在と時間』の存在の問いの計画

本章ではまず、『存在と時間』におけるハイデガーの存在の問いの計画の内容を再確認する。『存在と時間』におけるハイデガーの眼目は「存在について了解することが可能になる地平」を獲得することにある（SZ 231）。この目的のために、ハイデガーは存在者の中でも唯一存在を了解することができると思われる「範例的存在者」（SZ 7）である「現存在」の「存在構造」の分析に着手する。ハイデガーの分析は、現存在には「実存」、「情状性」、「頽落」によって構成される「気遣い構造」という存在構造が備わっている、という結論に行き着く。しかし、この時点では、この構造の三契機に関して、何によってこれらが相互連関して「現存在」という統一的なあり方を可能に

しているのかが不明であった（SZ 196）。『存在と時間』の後半になって、時間性という観点を導入することにより、これら三契機を統一的に見ることが可能になる（SZ 327）。そして、この分析によってハイデガーが獲得する洞察とは、〈時間というものの言わば働きによって、存在了解が可能になっている〉ということである（SZ 1）。存在了解の地平としての時間性は、所謂〈図と地〉の関係における地にあたり、この時間という地のおかげで、存在了解が成立するというのである。

このような視圏が開かれることによって、ハイデガーによれば、〈では、この地としての時間は、どのように歴史的にこれまでの存在了解を規定してきたか〉と問うことが、初めて可能になる（SZ 20-21）。その際に行われるのが、ハイデガーによれば、歴史の「解体」である。この解体においては、「一般的に存在論の歴史の経過において、存在の解釈が果たして、またどの程度まで、時間の現象と主題的に考え合わされたか」（SZ 23）ということが検討されることになる。言わば、存在と時間の関係性の歴史的変遷が問われることになる。これは、これまでの哲学的古典をハイデガーの存在の問いに資する角度から再解釈し、これまでの哲学史上での存在の問いの問われ方の変遷を明らかにすることとして遂行される（SZ 22）。そしてこの問いへ応えが、ハイデガーによれば、〈プラトン・アリストテレス以降、地としての時間は通俗的時間（未来から過去へと直線的に流れる時間）であり、その結果、図である存在了解は、非本来的な存在了解（存在忘却）であり続けた〉、というものである。この非本来的な存在了解は、時間的には、〈最早変わらないと諦められた過去をもとに、言わば「どうせこうなるだろう」という高を括った仕方で未来を予測するという仕方で、そのつどの存在者のあり方（存在）を了解すること〉と言えると考えられる。

時間性が見出された後に可能になったこのような新たな観点のもとで、現存在分析も「再開」されるべきであると、すでに引用したように、ハイデガーは『存在と時間』の冒頭で次のように述べている。「やがてこの〔時間性という〕地平が得られたあかつきには、〔他の存在者についての分析に加えて〕準備的な現存在分析論も、いっそう高次の、本格的に存在論的な地盤の上で、あらためて反復される必要がある」（SZ 17）。晩年のハイデガーも「現存在分析の再開は、既に『存在と時間』の開始の時点に共に属している」（「時間と存在」）（１９６２年）（GA14, 40）と述べているが、このような地平を獲得するまでの分析が基礎存在論であり、基礎存在論がこの地平を獲得したのちに、当初から計画されていた転回を経て、新たな視座から現存在を含む全存在者を分析し直すメタ存在論が開始されると考えられる。

すでに述べたように、この転回は最初から存在の問いの内で計画されていたと考えられるのだが、従来の解釈では『存在と時間』以後、基礎存在論は撤回され、新たな試みの開始として転回が始まったと考えられることが多かった。しかし、それに反対する本論の第一章と第二章における論拠に加えて、次の点も転回解釈Ｂ２を支持しうると考えられる。それは、存在の問いの最大の要点であると考えられる〈時間が存在了解の地平である〉という洞察に基づいて、ハイデガーの通俗的時間批判が晩年まで一貫して行われているという点と（GA64, 121; SZ 426-427; GA 26, 268; GA40, 215; GA65, 257; GA8, 100）、その批判を根拠として行われる哲学史の「解体」（伝統的形而上学批判）も、事柄としては晩年までなされ続けたということである（GA21 249; SZ 429; GA8, 100）。この前者の点は、基礎存在論において〈時間が存在了解の地平である〉という洞察が獲得されることを必要とする。また、後者の点も、そこから問いの転回を経て、基礎存在論における現存在分析の可能性の根拠を問うメタ存在論において、目下の現存在の構造を可能にしている存在の歴史の分析を必要とする。以上のことから、第二章で述べたような語彙の変化の内でも、『存在と時間』の問いの計画の基本的な枠組みは、変わらず継続されていると考えられるのである。

しかし、存在の問いの計画にかかわる事柄に関して、ハイデガーが事柄的に変化したと実際に述べていることもある。それは、周知のように『存在と時間』の時期の（１）時間性が空間性を基づけるという発想（SZ 367）が撤回されたこと（GA14, 29）と、（２）世界概念を地平として解釈する発想（SZ 364）の撤回である（GA97, 487）。これらのことは、存在の問いの撤回には結びつかないのだろうか。

まず（１）についてであるが、ハイデガーは『存在と時間』の時期の時間性、あるいはその言い換えである「テンポラリテート」を、中期・後期には「時-空」と言い換えていると考えられる(GA29/30, 220、GA65, 22、GA65, 18、GA94, 272 などを参照）。この言い換えには、根源的時間と根源的空間は等根源的であるという反省が反映されている。しかし、そこで１の意味での転回の生じる契機である時間性やテンポラリテートの発想が破棄されたわけではなく、時-空の概念に『存在と時間』における時間性が担っていた役割は引き継がれている。例えば、１９３６-３８年では「時間性を最も極端な仕方で測ること」という表現が登場するが、これは『存在と時間』の言い方で言えば「先駆的決意性」、すなわち本来性のことである。そして、このことは「存在の真理の空間を張ること」や「時-空を告示すること」と言い換えられており、このことが行われるのは「「存在」を否定するためではなく、存在の十全に本質的な肯定可能性の根底を設立するためである」と述べられている。これは、存在を無としてではなく、何らかの仕方で明るみに出すこと、『存在と時間』の言葉で言えば、「存在の対象化」のことであると考えられる。このように、事柄としては存在の問いの方法論が、後期においても繰り返し述べられていると考えられるのである。

（２）については、『存在と時間』の時期には時間性の地平と同一視されていた世界概念は、その後、段階的な変遷を経て、１９４０年代後半には「神」、「人間」、「天空」、「大地」を構成契機とする「四方域」へと言わば変化、深化することになる。四方域の描写では、世界は人間（あるいは他の契機）によって排他的に基礎づけられるわけでは決してなく、四契機の相互性によって初めて成立するという点が強調され、主観主義的な解釈が明確に退けられている。しかし、神、人間、天空、大地は、結論を急げば、メタ存在論が主題とし（GA26, 199）、その時点では時間性の地平が「とり囲む」とされた（GA29/30, 220）（１９２９・３０年）存在者全体の具体化であると考えられる（GA39, 183、GA39, 215 を参照）。確かに世界を地平という語によって表現することは改められたものの、それは第二章で論じたように地平が「形而上学の言葉」に属するということを主因とするのであって、決して基礎存在論において論じられていた時間性と世界の関連そのものが破棄されたわけではない。

『哲学への寄与論稿』では「時-空（「テンポラリテート」）を基づけること」が、「性起」へと言い換えられている箇所がある（GA65, 18）。後期ハイデガーにおいては、時-空としての世界の成立は、近代的主体が制御しうることではなく、存在の歴史的動向による性起（出来事）として可能になるということが表現の点でも明確化される。しかし、これは事柄としては、メタ存在論が、現存在はそれ自体で可能になるのではなく、現存在を含む存在者全体が現存在にとっての言わば他力として成立することによって初めて可能になるということを１９２６年の時点ですでに主題としようとしていたことと連続的であり、この主題がここに来て初めて具体的に展開され出したと言えると考えられる。

このように、存在の問いの計画において事柄的な変化は認められるものの、それでもやはり同じ方法論に基づく分析は継続しており、しかも、１の意味での転回を経て初めて分析可能になるとされた事柄が、引き続き記述され続けていると考えられるのである。

第四章：　歴史的転回の前提条件：頽落・作為機構・総かり立て体制

ここまでは、第一章で述べた転回の多義性のうち、１の意味における転回にかかわる事柄について主に扱った。第四章からは、２（３、４）の意味の転回にかかわる事柄を主題とする。

ハイデガーは基礎存在論からメタ存在論への１の意味の転回によって存在の問いの歴史へと目を向けることが可能になったが、ハイデガーは後期になると、この時間と存在の相互関係の歴史的変遷を「存在の歴史」と呼ぶようになる。この存在の歴史における、現-存在あるいは死すべきものとしての人間と存在の相互関係のことを、ハイデガーは転回と呼ぶ。そこで、この２（３、４）の意味での転回は、さらに次の三義に分けられると考えられる。

まず一つ目は、（α）存在の歴史において将来的に生じうるとハイデガーが考えている一回的な「救済」のことを指す（GA79, S.71-72）。二つ目は、（β）この救済としての転回に連なる、存在

の歴史の一連の過程が、転回（あるいはハイフン付きの「性-起」）と呼ばれることがある。これには例えば「総かり立て体制」の成立も含まれ、これは「総かり立て体制」を「克服」することの前段階（「序曲」）を含むとされる（GA11, 45-46）。三つ目は、（γ）存在者と存在の相互的な働きかけによる、そのつどの世界性起（『存在と時間』の言葉で言えば世界が「時熟すること」）が、転回と呼ばれることがある（GA65, 259）。

本章より、本論は上記の多義性のうち、一回的救済としての転回（つまりα）に向かう歴史的過程としての転回（つまりβ）に関するハイデガーの記述を追ってゆく。そして、事柄としてはこの過程に関するものが、すでに『存在と時間』の時期に見られ始めており、この事柄に関して、前期とそれ以後で一貫する記述が見られうることを示す。

この際、本論は中期・後期ハイデガーを前期に読み込むという外観を持つことになる。しかし、本論前半で示した基礎存在論からメタ存在論への転回が『存在と時間』以前に構想されていたことを考慮に入れると、中期・後期ハイデガーにおいて遂行された存在の歴史についての記述は、前期ハイデガーにおいてある程度は見通され、準備されていたものであると考えられる。また、ハイデガーにとって１の意味での転回とは、それまでいたところとは関係のない別のところへと移行するということではなく、これまですでにいたところに、より深まった仕方で戻ってくるということであった。すでに述べたように、ハイデガーによれば１の意味での転回とは「存在論が己の出自に向かって打ち返される」（GA26, 199）ことを指すからである。転回とは、それを経ることで再び同じことが、しかしより根源的な次元から述べられることであるとするなら、転回を前後して同じ事柄が語られることがあるということは、偶然そのようなことがあったということではなく、存在の問いの道理に従うかぎり、必然的にそうでなければならないはずである。

つまり本論は、「前期ハイデガーに中期・後期ハイデガーを読み込むから、前期ハイデガーと中期以降との共通点が浮かび上がる」ということを主張したいわけではなく、「中期・後期ハイデガーにおける事柄が前期ハイデガーにも見られることには事柄上の必然性があり、それは、同じ存在の問いが転回を経て依然として問われ続けているからである」と主張することを試みる。

ハイデガーはこの（β）の意味での転回、つまり救済へと連なる存在の歴史の過程を記述するにあたり、まずは「存在忘却」あるいは「存在喪失」の状況から始めている。それは、存在の歴史の文脈では、伝統的な形而上学の支配、つまり、「作為機構」や「総かり立て体制」として表されている。他方、これは事柄としては、現存在の存在構造の分析過程においては、現存在の構造の一契機である頽落として、すでにその一部は表されていたと考えられる。さらに、現存在に頽落という契機が不可避的に属すことに関して、ハイデガーは１の意味での転回を経た後に、その根拠をメタ的に論じることが可能になり、その根拠が、〈存在の歴史において目下のところハイデガーが作為機構や総かり立て体制と呼ぶ原理が支配していること〉である、と言える可能性が示唆される。

ハイデガーが頽落、作為機構、総かり立て体制の異なる名称を通して基本的には同一の事柄を見続けていると本論が主張する根拠として、これらに、以下の共通点が見られることが挙げられる。それは、（１）存在を隠蔽する原理である点、（２）存在を隠蔽するだけでなく、そのような隠蔽が行われているということすらも隠蔽する点、（３）人間の独力によっては取り除くことができないという点、（４）価値的に否定されるべきもの（人間性の堕落等）ではない、という点、（５）本来的な出来事（現存在が本来的に存在することや、一回的転回（救済、存在の性起）の到来）の前提的条件と見なされている点、である。

第五章：　変化の兆し：開示される二つの可能性

第五章では、存在の歴史の過程において、存在忘却の次に、〈救済の可能性と救済されない可能性が見出される段階〉をハイデガーが想定していたことを示す。これは、先の存在忘却の状態からの脱却の重要な契機として捉えられている。そして、前章と同様に、『存在と時間』においても、事柄としてはこの事柄がすでに部分的には捉えられていたことを示す。

存在の歴史の文脈において、救済の可能性と救済されない可能性は、人間がそのいずれを準備するかを決断しなければならない可能性として現れる。「本質的に歴史的であり、隠されている人間は、〈作為機構の優勢〉か〈性起の支配〉かを唯一的に決断することに耐えることへと、機が熟すようにしなければならない」（『省慮』）（１９３９-１９４１年頃）（GA96, 59）。

これに対して、『存在と時間』においては、不安という気分に襲われた現存在に、自己に備わる可能性として〈本来性か非本来性か〉のいずれを選択するかという決断が迫ってくる、ということが述べられている（SZ 191）。以上の二つの〈あれかこれか〉の決断は、一見文脈がかなり異なるように見えるが、以下の共通点がある。

（１）存在の歴史の文脈の場合、このような決断が可能になることは、ハイデガーによれば、その前提として、作為機構や総かり立て体制の支配を必要とする（GA7, 34）（この事態を指してハイデガーは好んでヘルダーリンの詩の一節「危険のあるところ、救うものもまた育つ」を引用している）。それと並行的に、現存在分析においても、現存在に頽落という構造が備わっていることが、〈頽落への「対抗運動」を行なうか、頽落に身を任せるか〉という選択として、〈本来性か非本来性〉かを迫る選択が可能になる前提となっている。

（２）存在の歴史の文脈において、この決断への「無関心」は、おのずから、ハイデガーにとっては救済されないことを選択することと同一視されている。『存在と時間』においても、本来性と非本来性に関する「無差別相」は、結局のところ、非本来性と同一視されていると考えられる。そして、いずれの文脈においても、この選択自体から逃避しないということそのものが、救済を準備すること、本来性を実存することと同等視されている。

しかし、なぜこのような共通点が見出されるのだろうか。それは、単にキルケゴールに由来するモチーフが場当たり的に繰り返されているから、というのではなく、このモチーフの反復には事柄上の必然性があると本論は考える。『存在と時間』において〈本来性か非本来性か〉として捉えられていた事柄は、問いの転回を経た後の分析では、存在の歴史において〈〈性起〔＝救済〕の支配〉か〈作為機構・総かり立て体制の優勢〉か〉として、捉え返されることが可能になった、と考えられるからである。

『存在と時間』における本来性は、後期ハイデガーにおいては〈本来的な「死すべき者」になること〉として再解釈されている。「「死への存在」は、実存論的・脱自的・性起的に思索されるなら、人間がその本質において、本来的に死すべきものになるということである」（『注釈』）（１９４６-４７年）（GA97, 285）。『哲学への寄与論稿』では、『存在と時間』の死への先駆や、本来性か非本来性かの選択の再解釈が行われているが（GA65, 101 等）、ここでハイデガーにとって本来性とは、一回的性起（救済としての転回）への「長い準備」へと決意することを意味するようになっていると考えられる（『哲学への寄与論稿』）（１９３６-３８年）（GA65, 229）。そして、すでに述べたように『存在と時間』の〈本来性か非本来性か〉が頽落傾向への対抗として行われているのと同様に、『哲学への寄与論稿』における〈性起への長い準備か否か〉も、作為機構への対抗として捉えられている。このような『存在と時間』の時期の本来性や〈本来性か非本来性か〉の再解釈は、ハイデガーによる後付けのものとしてではなく、すでに『存在と時間』の時期にある程度予告されていた「やがてこの〔時間性という〕地平が得られたあかつきに」可能になる「いっそう高次の、本格的に存在論的な地盤の上で、あらためて反復される」（SZ 17）現存在分析であると捉えることができると考えられる。つまり、現存在分析において現存在が本来性か非本来性かのいずれかへと決断しうると記述されたことは、その根拠として、存在の歴史において、人間が性起に向かうか否かに開かれうる段階が可能であるということを持つと考えられる。

以上を振り返ると、ハイデガーによれば、存在の歴史において、人間は目下のところ、存在忘却の渦の中にいるということになる。それは、この「渦の中にいる」ということすら忘却するほどの影響力を持っている。そんな中で、ふと、一回的転回の可能性が予感されることがある。ここで、〈このまま渦の中にとどまるか、あの性起を目指すか〉を決断する機会が初めて生まれる。この場面で、性起が起こる方へと賭けることが、転回への準備（『存在と時間』の言葉で言えば本来性）

である。そして、この性起においては、これまでの存在忘却という、ハイデガーによればプラトン・アリストテレス以降支配的となった歴史の基調路線が刷新されることが起こるという（その場合、現在支配的な頽落や、総かり立て体制などの動性も、根本的に克服されるという）(GA65, 186)(GA65, 412）（GA11, 45-46）。この転回の可能性を見出すことは、前章で扱った〈一面的に隠されている隠蔽状態〉に「亀裂」が入ることを意味することになる。

第六章：　本来的動性：再臨、死、性起に向かうエネルゲイア

ここまで、〈まず隠蔽状態が成立しており、そこから、その隠蔽の原理そのものが根源的に克服される可能性と、そうならない可能性との二つが露わになる〉という、ハイデガーの存在の歴史に関する記述を追ってきた。

本章が扱うのは、前期の言い方では本来性、後期では一回的性起を準備すること、この両者に共通する（前期の言葉で言えば）存在論的な動性である。結論から言えば、ハイデガーにとっての本来性あるいは性起への準備は、当該の存在者（前期では現存在、後期では死すべき者）が、自己に固有な限界的可能性を目指すことという点で共通している。この可能性は、前期ハイデガーにとっては再臨や死であり（ただし、この人間は死を目指すという点は後期でも「死すべきもの」としての人間解釈へと引き継がれている）、後期ハイデガーにとっては、救済としての転回であると考えられる。

そのように述べることができる論拠としては、再臨、死、救済としての性起に、次の共通点が認められることが挙げられる。すなわち、（１）再臨や死、性起が起こった後は、それ以前と同じ状況下で「再臨や死、性起へと向かう」ということそのものが不可能になる点(GA60, 120; SZ 329; GA11, 45-46）、（２）再臨や死、性起そのものを「表象する」ことはできず、それに伴い、再臨や死、性起がいつ起こるのかを前もって特定することはできない、という点（GA60, 104; SZ 258; GA14, 28-29）、そして（３）再臨や死、性起という将来に向かうことは、それに向かう者が過去を再解釈し、現在においてその存在者が本来の姿で存在することを可能にする点（GA60, 95; SZ 268; GA79, 71-72; GA65, 59）である。

このような共通点がハイデガーにおいて見られる理由は、ハイデガーが一貫して、直線的時間によって可能になる因果関係（過去→現在→未来）の支配への対抗馬として、未来→過去→現在という時間の動きを想定しているからだと考えられる。限界的な将来を起点とすることが、現在における、それまで支配的な因果関係に囚われない変様を可能にする、という原理はハイデガーにおいて一貫している。

ところで、これまで本論が見てきたハイデガーの救済に向かう過程は、ある意味では、キリスト教的終末論の現代的解釈と言いうると考えられる。実際、ハイデガーの一回的性起＝転回の議論の原型は、『存在と時間』以前のパウロ書解釈における「再臨」（パルーシア）の議論にすでに見られると考えられる。

ただし、ハイデガーの“終末論”は、終末の到来のために現在を犠牲にすることを是とするような、その意味で禁欲的なものではない。そうではなく、終末を準備することが、準備するそのつどの具体的状況（現在）において既に、ある意味での“最善”を尽くすことと同義となるような“終末論”であると考えられる。その意味では、ハイデガーにとっては、いわゆる現世と来世という区別はなく、徹底的にただ現世だけがあり、現世での救済のみを目指していると言える。二世界論的な区別は、ハイデガーにとっては〈流れ去る時間〉に基づく〈時間内にある現世と時間外にある来世〉という図式を前提とするプラトン主義として捉えられている。

また、自己に固有な最終的なテロスを目指すこと（ハイデガーのアリストテレス解釈としては、これは「ヌース」の動きである）は、従来のハイデガー解釈では、〈独断的な決断主義を可能にし、身の回りの人や物事と思慮深く付き合うこと（ハイデガーのアリストテレス解釈としては、これは「プロネーシス」の動きである）の次元を不当に排除する〉と捉えられることが多かった。敷衍して言えば、将来を重視するあまりに、現在を犠牲にすることになるのではないか、と捉えられてき

たと考えられる。しかし、本論によれば、このような可能性を目指すことは、その可能性（再臨、死や性起）が実現するまで言わば報われるかどうかがわからないような、一方通行の行為を為すことではない。このような目的を目指すこと（アリストテレス解釈ではヌース）は、いまこの場で、現在を最大限に充実した仕方で生きること（アリストテレス解釈ではプロネーシス）と、ハイデガーの場合矛盾しないと考えられる。

第七章：　言葉が鍵となる：言葉は本来的な可能性を名指す

では、人はいかにして本来性を実存しうるのか、あるいは、性起への準備に参与しうるのだろうか。ハイデガーによれば、ここで鍵を握るのが言葉である。ハイデガーにとって本来性の可能性や性起の可能性は、あらかじめ絶対に確実な可能性として前提されうるものではなく、その可能性は、現存在が決断において企投するもの、死すべきものとしての人間が準備するものであり、言わば、それはそれが可能であるという方へと賭けられる他ないものである。その際に、この言わば賭けを可能にし、本来性や性起を人間が向かいうる可能性として設定しうる役割を持つのが、ハイデガーにとっての言葉である。ただし、この言葉は「沈黙」をも含むと一貫して述べられている。このことは、ハイデガーにとっての言葉が、１の意味での転回以前も以後も、次の二つの機能を持ち続けたことに関係すると考えられる。

ハイデガーにとっての言葉の役割は、『存在と時間』の時期の用法（「形式的告示」(GA29/30, 425等）としての言葉）と、それ以降（大まかに言うと、「存在の家」としての言葉）とでは、断絶があると考えられることが多かった。しかし本論は、時期を問わず、（１）世界構成的な役割と、（２）存在者の様態を決定しうる役割が付与されていることを明らかにする。

（１）に関して、基礎存在論において言葉は、発語以前の次元において「意義」をもたらすこととして、世界の有意義性を可能にする役割を持っている（『論理学』）（１９２５-２６年）(GA21, 151）。有意義性というのは、現存在によって企投される現存在の特定の存在可能性（例えば「自分の建てた雨よけに泊まる」）を目的とする仕方で、世界内の存在者をそれとして（例えば「ハンマー」として）意義付けすることである。この有意義性によって、ハンマーは、初めてハンマーとして、他の存在者から分節化される。有意義性はこのような言わば世界の切り分け機能を持つのである。そしてそのためには、有意義性を成立させる地平としての世界（すなわち、テンポラリテート）が、存在者の存在可能性が成立する場としての「将来」、既在存在が成立する場としての「既在」、ハンマーのような存在者が現れる場としての「現在」へと、すでに分節されていなければならないが、これを可能にするのが『存在と時間』においては「語り」としての言葉であった。なぜなら、『存在と時間』においては、語りが、この時間性の三分節として最終的に解釈されることになる現存在の気遣い構造の三肢を可能にすると述べられていたからである。「了解、情状性、頽落によって構成される現の完全な開示性は、語りによってその分節を受け取る」（SZ 349）。だからこそ「語りの時間性〔…〕によって、「意義」の「発生」は初めて解明され、概念形成の可能性が存在論的に了解可能になる」（SZ 350）。ハイデガーは語りの時間性を、了解、情状性、頽落の時間性のいずれにも帰属させることがないが、それは語りが了解、情状性、頽落のいずれかによって成立する存在者なのではなく、それらをそれとして分節する側として見られているからであると考えられる。ハイデガーは『存在と時間』において「お喋り」と上記の意味での語りの混同を避けようとするが、それは前者が存在者的に捉えられた言葉であることに対して、ハイデガーの語りは言わば存在の一契機であるからだと考えられる。

中期・後期ハイデガーにおいては、前期の上記の説明のように分析的に言葉の機能が述べられることはない。しかし、言葉の性起とは世界の性起でもあり、「言葉があるところにのみ、世界がある〔…〕」（１９３６-４４年）(GA4, 37-38）と述べられる。これは、前期の分析の結論部分だけが述べられていると捉えることができる。そして、単なる情報伝達の手段として存在者的に捉えられた言葉は、この世界構成的次元にかかわる言葉とは一貫して区別され続けている。ハンス・イェーガーも『ハイデガーと言葉』の内で述べるように「『存在と時間』の言葉の分析の内に、すでに

言葉は「存在の家」であるという、後期のハイデガーの言葉を生み出す萌芽がある」と考えられる。
また、（２）前期ハイデガーにとって、形式的告示としての言葉は、それが名指す事柄の可能性の遂行性を、現在的に解釈せずに、可能性のまま保持する（つまり、将来そのものとして維持する）役割を持っていた（GA61, 141）。中期・後期のハイデガーにとっても、言葉とは、存在者の存在を、それがあるべき場所（ハイデガーにとっての将来や「到来」）に保っておく役割を担わされている（「言葉」）（１９５０年）（GA12, 18）。事柄としては、ハイデガーにとっての言葉は時期を問わず、〈世界の世界性を分節し構成する契機であり、その本来的な使用は、存在者の存在可能性を現在的に解釈することを防止し、それが将来そのものに位置するようにする〉という働きを変わらず持ち続けていたと考えられる。そして、この（２）の機能によって、現存在や人間が本来性や一回的転回の可能性を企投すること、準備することが初めて可能になると考えられる。その際の企投の動きを、ハイデガーは「信じること」と呼ぶこともある（GA65, 369）。ハイデガーにとって本来性や、存在の歴史の末に可能な救済は、絶対の実現の保証があることでは決してなく、その可能性を見据えることで可能になる現在における本来的な行為を通じて、それの実現へと賭けられるものである。

以上、本論は第一章から第三章までを通して問いの転回について扱い、『存在と時間』における存在の問いの計画がその後も主要な点では継続されていることを示すことを試みた。次に、第四章から第六章までは、存在の歴史における歴史的転回の過程について扱った。ハイデガーは前期から後期に至るまで同じ存在の問いの計画を遂行しており、転回後の分析は現存在分析のある意味での「反復」を含む。よって、存在の歴史における転回の各過程の萌芽が、事柄としてはすでに『存在と時間』における現存在分析においても一部見られることには、事柄上の必然性があると考えられる。そして第七章では、ハイデガーにとっての本来性や転回への準備を可能にする言葉の役割の一貫性を明らかにすることを目指した。
本論のような解釈は、従来の解釈傾向に比べ、ハイデガーの思索の変化を少なく見積もろうとするものであると言える。このような解釈傾向が近年刊行されたばかりの新資料によって初めて可能になりつつあるという点は、本論もその例に漏れない。本論は筆者の力量不足から、ハイデガーの文献解釈以上のものには未だなり得ていないが、たとえば存在の歴史というハイデガーの着想の是非を吟味するとなると、隠れた名哲学史家でもあったハイデガーに比肩しうる知見が要求されると考えられる。それはまだ筆者には及ばない目標であり、今後の課題としたい。